22 『全九集』の編纂者とその意図

○遠藤　次郎、中村　輝子

『全九集』は曲直瀬道三の師、導道が一二年間の留学後、明から持ち帰った医書として有名である。しかしながら、本書は、編者といわれる月湖をはじめ、多くの未解決の問題が多い。今回、演者らは『全九集』の編者ならびに編纂の意図について検討した。なお、『全九集』は、月湖が編纂したとされる漢文体のもの（以下、真名本）と真名本を曲直瀬道三が和訳したとされる仮名交り体のもの（以下、仮名本）、の二つに大別される。

通説では、『全九集』は導道が一四九八年に中国より持ち帰ったとされているが、これには疑問の点が多い。その一つとして、本文中に王綸の『明医雑著』（一五〇〇年初刊）の記述が数多く引用されている点があげられる。その例を以下に示す。①四賢ノ弁（外感法仲景、内傷法東垣、熱病用河間、雑病用丹溪、一以貫之帰於内経、此医道之大全也）。②治諸病先調胃説。③俗医誤嗜参芪之論。④感傷中。⑤両腎二補之別。⑥脾胃気血之弁。『明医雑著』からのこのような引用がみられる点を考慮するならば、年代的にみて導道が『全九集』を中国から持ち帰ったとするには無理があり、また、導道の先生、月湖が『全九集』を編纂したとも考えにくい。

そこで、あらためて、『全九集』の編者について検討を加えたい。これに際して、『当流医学之源委』の以下の記述が参考になる。⑦「因父母之懇望而為菊地彦四郎、神庭宗次郎、自天文十一年至十三年、明於医業一流、集聖賢ノ遺旨、綴以成全九集七巻、而授干両童」。この記述は仮名本（七巻）の由来であるが、仮名本が真名本を訳したものであるとは言っていない。ここでは真名本と仮名本に共通する『全九集』の編纂方針を述べている。このことは、道三が両書の編纂にかかわっていたことを示唆している。さらに、『当流医学之源委』には、道三が弟子に書き与えた医書（「截紙」）の表（「対学侶宜使授与之次序」）があり、この中で、中の下クラスの弟子には『仮全九』

（仮名本）、中の上クラスの弟子には『真全九』（真名本）を与えたと記している。この表の医書はすべて道三が著したものであることから考えて、真名本も仮名本と同様に曲直瀬道三の著作と見做すべきであろう。

『全九集』の編纂の意図を考えるに際し、本書の特徴的な構成が注目される。例えば、巻之三のはじめの四篇は次のように構成されている。

⑧右拾箇条先欲入医学之門可明之者也

⑨右八箇条診切之学将熟者可候焉

⑩右七箇条者診切之奥儀也

⑪右一十九箇条固医門之奥室秘中之秘成也

ここでは入門篇（⑧）から奥儀篇（⑩、⑪）へと順次配列している。また、ここでの表現は、道三が弟子の段階に応じて与えた印可状とでもいうべき『切紙』の表現に近似している（「凡七事之弁剤者当流調合奥儀」など）。以上のことから、『全九集』は道三流（当流）の印可書的な意味合いが強いことがわかる。

演者らは道三における「当流」の意義についてすでに検討し、この言葉の中には、自分の流派は当時中国で主流であった丹溪の流派を継承しているという強い自負が込められていることを明らかにした。このようなことから、弟子に与える印可書は自分が作ったものではなく、自分の師から授与されたものである、という形式を望み、そこで、『全九集』の編者を月湖とし、月湖は導道の先生であるという話を作り上げたと推定される。

道三が編纂した『全九集』以前に原『全九集』が存在していたか否かは不明である。あるいは、月湖ならびに景泰三年の陳叔舒の序文は原『全九集』のものであったかもしれない。

（東京理科大学薬学部）